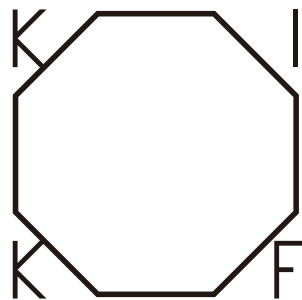


KIKOF



KIKOF EXHIBITION AT SPIRAL IN OMOTESANDO

会 期：2014年11月4日(火) - 11月24日(月祝)

オープン：11:00～20:00

会 場：スパイラルエントランス(スパイラル1F)
東京都港区南青山 5-6-23

FOR PRESS

- ・オープニングパーティー：11月4日(火) 20:00～22:00 ※ご招待者のみ
- ・11月4日(火) 13:00～15:00 は、デザイナー・職人が在廊致します。
取材希望がございましたら、お問い合わせください。





KIKOF (キコフ) は、Mother Lake Products Project という活動をきっかけに生まれた、東京を中心にグラフィック、プロダクト、ファッションなど幅広い分野でデザイン活動を行うキギと、滋賀県の琵琶湖周辺を拠点に活動する伝統工芸の技術者たちが共同開発をするプロダクトブランドです。670.25km²という日本一大きな面積を持ち、満々と水を湛える豊かな琵琶湖。この琵琶湖周辺には、陶器、縮緬、麻、木工、漆、仏具などの製造を生業としている職人たちが数多くいます。歴史的に、使い手に喜ばれる質の良いものを効率良く、の精神でものを作り販売してきた近江商人の気質がそうさせているのか、職人たちはみなチャレンジ精神に溢れている方ばかり。日本の母なる湖から生まれた伝統文化や技術が、絶えることなく脈々と受け継がれていくことを願い、その時代、時代の生活に寄り添い、長く愛用されるプロダクトをゆっくりと作っていきます。

1st プロダクトとして発表された信楽焼のテーブルウェアに続き、11月の展示会では木工家具、近江の麻でつくる座布団とランチョンマット、浜ちりめんのサシェなど、現在開発中のプロダクトをお披露目します。キギと滋賀の職人とでつくる KIKOF のはじまりをどうぞご覧ください。

※「Mother Lake Products Project」佐藤典司氏（立命館大学）により立ち上げられた、琵琶湖をはじめとする滋賀県の風土と、長年培われてきた工芸の技術を活かし、現代のライフスタイルに合う伝統工芸品づくりを目指すプロジェクト。
www.shiga-motherlake.jp

INTRODUCTION

最初に「Mother Lake Products Project」の発起人である立命館大学の佐藤典司先生と出会いました
そして 滋賀県の琵琶湖近隣で 陶器 木工 麻 縮緬 漆 仏具などを生業とされている職人さんたちと出会いました
私たちは このプロジェクトに参加し 職人さんたちと商品を共同開発をすることになりました
水を満々と湛えた琵琶湖は「日本の大きな器」である
1st プロダクトとして 私たちは丸漕製陶さんと一緒に「器湖」という名の器をつくることにしました
そして KIKOF というブランドを立ち上げました
私たちは 日本の母なる湖からモノが生まれ
伝統文化が絶えることなく脈々と受け継がれていくことを願います
キギ

KIKOF EXHIBITION にて、新作を発表します

テーブルウェア / TABLEWARE

信楽焼のテーブルウェア。グラフィックデザインがベースにあるキギらしく、まるで紙で成型したような、直線のみで構成されたシンプルなデザインで、非常に薄く、ごく軽いことが特徴です。約 250 万年前、現在の信楽地方は琵琶湖に沈んだ土地でした。湖底に溜まった土砂やプランクトンが隆起し、250 万年のときを経て粘土化してできた土が信楽焼の材料となっています。その信楽の土だからこそ実現した薄さやかたち。今年の夏に発売となった、プレート、ボウル、マグ、ピッチャーに加えて、新たに大皿やスプーン、カップ&ソーサーなどを発表します。

製造：丸漕製陶株式会社 今井 智一

家具 / FURNITURE

6人がけの大きなテーブル、椅子、スツールのプロトタイプを発表します。デザインはテーブルウェアの造形から展開し、紙で成形したようなかたちをベースに、キギと木工職人とアイデアや試作を重ねてつくっていきました。材には、琵琶湖周辺の杉の木を使用しています。家具より建材として使用されることが多い木材ですが、滋賀にも多くある杉を活用したいという家具職人の想いと、キギがデザインした特徴的な厚みを制作する行程や重さなどの使い勝手を考慮したときに合致した材でした。座面の加工はやわらかい杉材だからこそ。天面 / 座面に一枚板を使用しながらも、一般的な家具材に使用されるタモやナラと比べると重さが約半分程度という杉を使ったこの家具は、テーブルウェアと同じ特徴を持ち、とても軽く仕上がっています。

製造：COUSHA FURNITURE 川端 健夫

ランチョンマット / PLACE MAT 座布団 / CUSHION

かつては近江ちぢみと呼ばれる麻織物の生産が盛んだった琵琶湖の東。鈴鹿山脈から琵琶湖に流れる純度の高い水と琵琶湖が発する湿気が製造に適していたことから、東近江市は古くから麻織物の産地として発展を続けてきました。近江上布の代表的な技法である「緋」は多くの工程から成り立ち、その熟練の技と作り手の想いは現在まで受け継がれています。この地の麻織物の手仕事の良さを伝えたいと活動を続ける小さな工場がつくる上質な近江の麻とのコラボレーション。KIKOF の器で食事をしながら、テーブルまわりを楽しむアイテムを作りました。

製造：北川織物工場（ファブリカ村） 北川 陽子

サシェ / SACHET

江戸時代中期（1750 年頃）から始まったとされている長浜の浜ちりめんは、琵琶湖のほとり長浜で生産されてきた最上質の絹白生地。八丁撚糸（はっちょうねんし）と言われる撚糸（よこいと）に何千回と撚（ひね）りをかける技法は浜ちりめんの特徴で、その強い撚りが絹の美しい光沢となめらかな肌触りを生み出しています。浜ちりめんをシンプルに使ったアイテムとして、ドール型サシェ（匂袋）を制作しました。サシェの香りは、琵琶湖や伊吹山など滋賀の自然をイメージしたものが入っています。

同じく浜ちりめんを使ったぬいぐるみのプロトタイプも発表します。これらサシェやぬいぐるみは「DOLLF（ドルフ）」というブランドラインで展開していく予定です。

製造：シルクライフジャパン株式会社 長谷 高行

<デザイン>



キギ 植原亮輔／渡邊良重

アートディレクター。企業やブランド、ショップなどのアートディレクション、D-BROS をはじめとした商品デザインなどを手がける。グラフィックデザイン会社である DRAFT を経て、2012 年にキギを設立。それぞれが個々に関わる仕事も行いながら、並行して DRAFT 在籍中の 1999 年より共同で仕事をはじめ、沢山の代表的なデザインワークを生み出している。プロダクトブランド KIKOF や、洋服のブランド CACUMA の立ち上げなど、自在な発想とデザイン力で、あらゆるジャンルを横断しながら、グラフィックの新しいあり方を探し生み出し続けている。共著書に作品集『キギ/KIGI』（リトルモア）。主な作品展に「キギ展」（ギンザ・グラフィック・ギャラリー、2012 年）、「続・キギ展集合と拡散」（ヒルサイドフォーラム、2013 年）ほか。

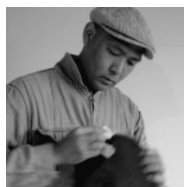
www.ki-gi.com

<製造>



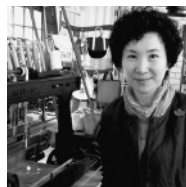
丸滋製陶株式会社 今井 智一

今井新左衛門により明治 10 年創業、火鉢を登り窯で製造。昭和 40 年頃より火鉢製造の技術を活かし、植木鉢の製造に変わる。昭和 50 年頃よりガーデンテーブルや傘立て等のエクステリア商品の製造を始める。平成 3 年、現当主（5 代目）の今井智一が入社。平成 14 年頃より現在の主力商品であるインテリアの手洗鉢の製造を始める。平成 15 年信楽焼新総合展グランプリ受賞、平成 25 年には TENT LONDON（英国）出展。平成 26 年「KIKOF」ブランドのスタートに合わせ、鑄込み成形による器を作り始める。



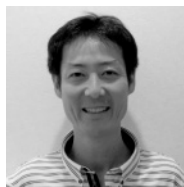
COUSHA FURNITURE 川端 健夫

1971 年大阪生まれ。東京農業大学林学科卒業後、農業法人に就職。農業者として土にまみれる。その後、技術専門校木工科を経て、木工作家・木内明彦氏に師事。2003 年甲賀の里山で木造校舎と出会い、工房を立ち上げ独立。家具を作り始める。2004 年その木造校舎をリノベーションし、マンマミーアという菓子工房とギャラリーをはじめ。子どもが生まれた 2006 頃からカトラリーやお皿など、暮らしのまわりの小さな道具をつくる。2011 年家具レーベル「COUSHA FURNITURE」を立ち上げる。



北川織物工場（ファブリカ村） 北川 陽子

東近江の地で「近江ちぢみ」と呼ばれる麻織物の生産を守りつづけ、半世紀にわたる歴史を誇る北川織物工場。知恵と工夫で培ってきた技術を生かし、伝統産業である近江の麻をモダンに表現して今に伝えたいという想いから 1999 年に北川織物オリジナルブランド「Fabrica」が誕生。2009 年、北川織物工場は東近江の歴史の伝承はもとより滋賀で輝く人、輝くものを応援する場「ファブリカ村」として新たな一歩を踏み出す。ギャラリー、カフェ、ショップの機能を持ち、「つくるよるこび」をテーマに滋賀のアーツ&クラフツを発信。2010 年 10 月メイドイン滋賀プロジェクトを始動。つくり手とつかい手のつなぎ手、つなぎ場を目指して活動中。



シルクライフジャパン株式会社 長谷 高行

これまで長きに渡り門外に出ず事なかつた絹織物で培ってきた撚糸技術（水をかけながら生糸に強い撚りをかける独特の技術）。その技術をシルク以外にも天然繊維を中心に応用発展させ、新素材を開発。（琵琶湖に生息するヨシを使用した織物、新素材高密度コットンシルクを使用したバックの開発など）シルクライフジャパンとして、2013 年には浜ちりめんによるライフスタイルブランド「afumiko」をスタート。また、2014 年にはシルクウオッシュアップ加工ブランド「kinumina」をスタートし、新技術の開発にも取り組む。